（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	高村 伸吾
論文題目	コンゴ民主共和国東部における流通ネットワークの再興と社会変容		

（論文内容の要旨）

本論文は、紛争によって深刻なダメージを受けたコンゴ民主共和国（以下「コンゴ」と記す）東部の流通ネットワークが、地域の人々の手によっていかに再興されているのかを実証的に明らかにしたものである。これまでの紛争研究においては、「国家の崩壊」や「秩序喪失」といったタームは頻出してきたが、現地の実情に照らした議論が展開されることは少なかった。本論文では、この地域においてこれまで誰も試みなかった長期の実踏調査に基づき、現地に居住するロケレ、トポケ、ボンガンドの3つの民族集団における生計戦略や流通構造の変化を記述し、国家不在とも言える社会条件における人々の営為と、それが持つ意味について考察した。

第1章「序論」では、これまでのアフリカにおける紛争研究の議論を整理した上で、本論の視座と研究課題について述べている。

第2章「対象地域と調査方法」では、調査をおこなったコンゴ東部の地理、生態、社会環境について概観した後、調査地域の選定過程、調査の経緯と手法を述べた。次いで研究の背景となる、植民地期以前からベルギー植民地期、独立、1990年代のコンゴ戦争に至るコンゴの歴史を、文献資料に基づいて詳述した。

第3章「紛争後における森林－都市流通の回復」では、1990年代以前の調査地域における経済状況について記述した後、その後勃発したコンゴ戦争の影響とそれに対する人々の対応を、主として森林地帯に居住する農耕民ボンガンドとトポケの事例によって示した。まず、紛争による流通システムの荒廃に対応して、農村部の住民たちが実践する、数百キロメートルにおよぶ「長距離徒歩交易」に着目し、森林内部で生産される商品がいかなる流通経路を通じて都市へと移出されるのか明らかにした。次いで、紛争後、森林地帯、河川、都市を結ぶ結節点として定期市が重要な役割を果たしていることを指摘した。さらに、トポケの人々が自らの手によって、崩壊した自動車道路の橋を再建し、地域の交通網を再構築した事例を報告し、トポケ社会に内在する課題と、「コレクティブ・インパクト」の可能性を示した。

第4章「チョポ州における定期市」では、調査地域に居住する農耕民たちが産物を売りに出す先である、大都市近郊の定期市について記述した。チョポ州の州都キサンガニから内陸農村部に至る広域調査の結果を踏まえて、まず、定期市の分布と規模を示し、その分類をおこなったあと、定期市の起源と歴史的変遷について記述した。次いで現在の定期市の相互のつながりと、紛争前後に新たに導入されたブリコラージュ的

な流通テクノロジーについて述べ、地域流通を担ってきた人々がいかにしてローカルな経済構造を打ち立てたのか、そして紛争前後に生じた流通構造が地域社会にいかなる影響を及ぼしたのかを考察した。

第5章「コンゴ河川商人の商業実践」では、今日の定期市の活況がどのような商業実践によって支えられているのかを、商業に従事する商人の活動の民族誌的記述から明らかにした。まず市の商人の属性、民族構成、移動手段について大まかな分類を行った。次いでそれぞれのカテゴリーの商人たちがいかにして商業活動を営んでいるのかを、彼らの日常活動を通して描き、彼らが用いる伝統知識や価値判断、社会関係を紡ぐ彼らの特性を抽出した。ライフヒストリー調査を通じて得た知見をもとに、それぞれの商人が辿る商業拡大の過程を描き、零細商人たちがどのようにして変化に対応しつつ利得を積み上げているのかを明らかにした。

第6章「討論」では、本論文の結論として、零細商業の潜在力についてこれまでに提示されてきた「静かな革命（Silent Revolution）」、「異人性（Marginality）」、「内発的発展（Endogenous Development）」という三つの分析概念を用いてこれまでの研究結果の整理を行い、冒頭に掲げた研究課題についての本研究から得られた解答を示した。